資料６

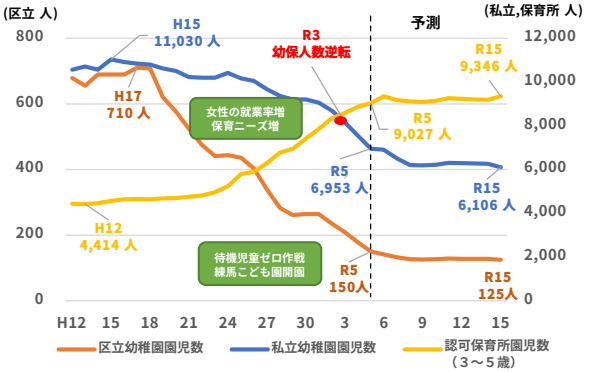
今後の区立幼稚園について

1　区立幼稚園の経緯

昭和50年	・区内初の区立園が開園（北大泉） ※ 幼稚園の空白地域解消、２年保育開始
昭和60年～ 平成元年	・光が丘地区に４園（あかね、むらさき、わかば、さくら）が順次開園 ※ 光が丘団地の開発に伴う需要増に対応、私立園の設置が見込めない
平成26年	・光が丘地区の２園を閉園（あかね・わかば） ※園児減少のため適正配置を実施。跡地を保育所として活用 ・北大泉幼稚園、光が丘むらさき幼稚園、光が丘さくら幼稚園の３園を運営

2　幼稚園児数について

区内園児数推移



●幼稚園の園児数は区立・私立ともに近年大きく減少。

（要因）女性の就業率増に伴う保育園利用の需要増、急速な少子化に伴う子どもの数の減

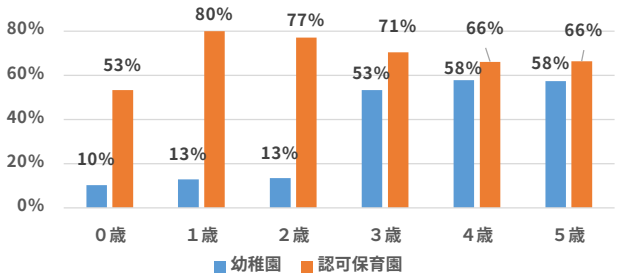
●３～５歳の幼児のうち、幼稚園に通園している割合は約４割、認可保育園に通園している割合は約５割であり、その割合は今後も維持される見込み。

3　保護者から幼稚園へのニーズ

●０歳児保護者の意向　☞３歳児からの預け先として幼稚園を希望する保護者が多くなる

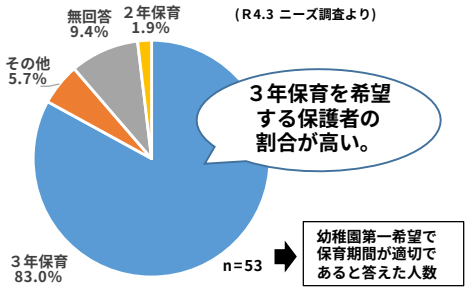
（質問）
現在０歳児の子どもの保護者に、現在と将来１～５歳になった時に利用したい施設を調査

「子ども・子育て支援事業計画ニーズ調査（R4.3）」加工



●幼稚園の適切な保育期間

（R4.3 ニーズ調査より）

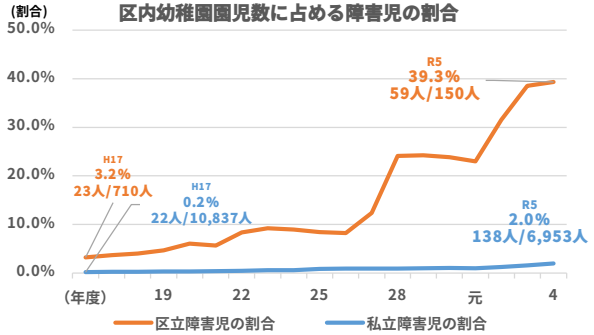


障害児保護者からの声

・３歳から利用したい（在園児）
・私立幼稚園に入園を断られた。区立幼稚園はサポートが厚く、ありがたい。（在園児）
・集団行動やお友達とのかかわりを通して社会性を育みたい。（こ発達利用者）
・発達に対しての何らかのアプローチや相談ができる施設が欲しい。（こ発達利用者）

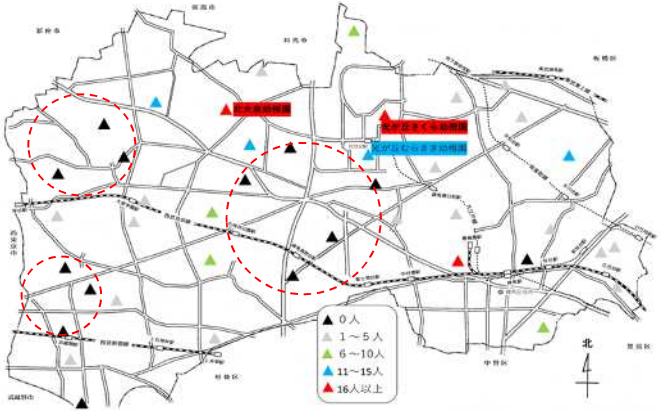
4　障害児の受入れについて

区内幼稚園園児数に占める障害児の割合



●私立、区立ともに障害児数は増加。
●区立の障害児の割合は高い(39.3%)
重度、医ケア児、私立からの転園者や入園を断られた園児などを受入れ。
●区立幼稚園への登園範囲は、半径１キロ以内が全体の約４割、半径１キロ超えが全体の約６割である。
●障害児が在園していない地域がある。

障害児の在園状況（Ｒ５.４月）



（参考）令和５年度各区立園の実績

園名	定員	園児数	うち障害児	充員率	障害児割合
北大泉	156	41	20	26.3%	48.8%
むらさき	168	54	13	32.1%	24.1%
さくら	168	55	26	32.7%	47.3%
計	492	150	59	30.5%	39.3%

5　幼稚園を取り巻く課題とその対応

●幼稚園を取り巻く課題（区立・私立）

- 少子化の影響　☞　今後も園児数減少となる可能性大
- 保育需要の変化　☞　「だれでも保育」の実施など保育園ニーズが更に高まる可能性
- 保護者ニーズへの対応　☞　障害児受入促進、３年保育への要望　など

区立

●園児数を踏まえた適正規模
●障害児保育における役割
●３年保育の必要性
について検討し、「今後の区立幼稚園のあり方」を明確にする。

私立

私立幼稚園と連携のうえ、
●障害児受入れの促進
●練馬こども園化の推進
に取り組む。